これこそリアルなハンター生活。

lx氷龍xl

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これこそリアルなハンター生活。

【Ｎコード】

Ｎ５８８３Ｚ

【作者名】

ｌｘ氷龍ｘｌ

【あらすじ】

遅刻の危機に襲われた啓介は全力ダッシュで学校へ向かっていた。その途中に少女が風船を取りに道路へ飛び出ていく所を目撃。啓介は少女をかばって風船を掴んだ。その後気が付けばそこは毎日プレイしていたオンラインゲームの世界。そこで自分がプレイしていたキャラと遭遇。そしてハンターとして生きることを決意する。その後あるゆるモンスターと戦っていく啓介の運命はいかに…？！

1話　ハンターさんの心得

ここはとあるオンラインゲームの世界。

俺は杉本（すぎもと）　啓介（けいすけ）。中学2年生だ。

何故俺がこの世界にいるのか分からない。

だがしかし、このゲームを俺は毎日のようにやっていた。

おれはこのゲームで「ミロク」として遊んでいた。

このゲームは、ほぼモン●ンのようなもの。

あらゆるモンスターをなぎ倒し、その報酬等で装備を完成させていく。

そしてオンラインゲームのため、世界中の人々と一緒にハンティングへ出かけることができるのだ。

俺はひょんな事でこのゲームの世界に入り込んでしまった。

そして、時は4日前に遡る。

「あぁー、だりぃーよー、早く帰ってこいよー」

そう呟いているのはミロクだった。

ミロクは啓介がログインしてくれてないため
啓介が帰ってくるまでベッドから動けないという規制がかけられている。
みんなにはこの辛さがわかるだろうか。
何も出来ずに横たわっている。
しかも人間は待っている時間が長く感じてしまうもの。
そのせいで余計辛く感じてしまうのだ。
いつもなら、ずっと寝ているので辛さは感じないが、稀にこのように目がさめてしまうことがある。

「ただいまぁー！」

啓介は学校が終わり急いで家に帰ってきた。
そして啓介がただいまといった所で返事は帰ってこない。
なぜなら、両親は仕事でいないからだ。
母親なら朝と夜はいるのだが、父親は離れたところに住んで仕事をしてるため
帰ってくることは殆ど無い。

「お？帰ってきた？啓介が帰ってきたのか？！」

ミロクはちょっと嬉しそうな顔を見せた。
啓介は駆け足で階段を登り、自分の部屋に入るとカバンを投げ捨ていきなりパソコンの電源を入れた。
完全に起動するまでの時間を使い制服を脱いで部屋着に着替えた。
啓介は完全なる厨２病だ。厨２病の日本代表だ。
そのせいか、部屋着も見事にダサい。

パソコンの電源がつくと、啓介はログイン画面を開いた。
そして、パスワードを得意の高速タイピングで打ち、ログインを完

了した。

――――――――ミロク　さんがログインしました。

「お？おぉー？！動けるぞぉ！帰ってきたのか、啓介ー！！やっとだぁー！」

ミロクのテンションはかなり上がった。

「なにこの解放感！？素晴らしぃ！」

ミロクはそのまま集会所へ向かった。
集会所とはクエストを受注できる場所で、クエストに関する情報が沢山乗っている場所でもある。
そして、集会所につくとそこはいつも以上に賑わっていた。
そう、今日はクエスト報酬1，5倍ＤＡＹだ。
そのせいでたくさんのハンターたちがここを訪れているのだ。
そして、ミロクがログインして2分も経たないうちに一人の男性がこっちに駆けつけた。

「おぉーい、ミロクゥー！遅かったじゃねぇか！」

「あ、いや、悪いな。啓介の帰りが遅くってよ」

「そうか、それはしゃあないな！俺らからすると、ご主人様見てえなもんだもんな！」

「あぁ、そうだな」

ミロクがログインするや否や駆け寄ってきたのはいつも一緒にクエ

ストへ行く
「たかやん」だ。
ミロクと同じくらいの実力の持ち主で毎回たかやんと共にクエストへ行っている。
たかやんはおっちょこちょいで天然混じりなムードメーカーだ。
あいつがいるだけで雰囲気が明るくなるような感じだ。

ーーーーーー
まずは、クエストのレベルについて説明しよう。
クエストのレベルには3段階存在する。
下から、下級、上級、アドバンス級と存在する。
ある一定のクエストをクリアすると村長からランクアップクエストを指示されるはずだ。
ランクアップクエストとはそのクエストをクリアするとその上の級のクエストに挑戦できるようになるものだ。
クエストはクエスト一覧表にズラリと並んでいる。
その中から一つ選び、受付嬢に申し出るとクエストを受けられる。
そして、クエストの依頼は誰でもできる。
村長に頼み報酬を用意できたらクエスト一覧表に貼り付けられる。
コレでクエストについての説明を終える。

次に、職業について説明する。
職業とは、得意分野のことを現す。
その職業で使える武器が決まってくる。
ではその職業を1つずつ説明していこう。

まず一つ目の職業はソルジャーだ。
ソルジャーは主に剣を使って戦う職業だ。
剣にもいろいろな種類がありリーチが長くて重いものや、リーチが短く軽いものなど

様々な種類のものがある。そして、それぞれメリットデメリットが存在する。
そのなかのメリットを生かし、デメリットをどれだけカバーできるかがキーになるだろう。
そしてソルジャーが扱える武器は、大剣、太刀、短剣、双剣、槍などが存在する。

2つ目はガンナーだ。
ガンナーは主に銃などを使う遠距離攻撃で攻める職業だ。
銃などを使うにあたって必要不可欠なのが銃弾だ。
それが切れると銃を撃つことができないため、単なる役立たずになってしまう。
そのようなことを、弾切れ、ということが多い。
そしてガンナーが扱える武器は、拳銃、ボウガン、ライフル、二丁拳銃、弓などが存在する。

そして最後がマジシャンだ。
マジシャンは主に魔法を使って味方をサポートする職業だ。
マジシャンは詠唱を唱えることによって、魔法を発動することができる。
詠唱は長ければ長いほうが強力だが、その分隙も大きくなってしまう。
そして、マジシャンはほとんど攻撃することはなく、見方を回復させたり、敵の動きを捉えたりするのが主な役割だ。
そしてマジシャンが扱える武器は、杖のみだ。

以上で職業についての説明は終了だ。
その他のことは、実践で身につけるのが一番だ。
君に幸あれ。
ーーーーー

「ん？どうしたのミロク？」

「あ、いや、このマニュアル、結構詳しく書いてあるなと思って。」

「あぁー、俺最初それ見ながら練習してたんだよ！」

「そうだったのか」

ミロクとたかやんではたかやんのほうが少しだけ先輩に当たる。
でも、大して上手さは変わらない。
ちなみに、二人は今上級クエストをやっている途中で
ミロクはソルジャー、たかやんがガンナーだ。

そして二人は早速クエストに行くことにした。

「そういえば、なんか行きたいクエストとかある？」

「そうだなぁー、俺、足りない素材あるんだよね」

「おぉ、なんの素材？」

「あの、ライムリアなんだけど、二丁拳銃強化するのに必要なんだよね」

「あぁ、いいよ」

「サンキュー♪じゃあ、準備が終わったらここで集合な！」

そう言って二人は上級の【雷神龍　ライムリア】の討伐クエストに

出ることになった。

1話　ハンターさんの心得（後書き）

感想評価お願いします！
お気に入り登録（、・∀・/）ノヨロシク！

2話　ライムリアとの死闘　前編

これからミロクとたかやんの死闘が始まる。
その為の準備を行う。
まずは、装備を考えなければならない。
今から倒しに行くのは【雷神龍　ライムリア】だ。
相手は雷属性なので、雷耐性値が強い防具で挑む必要がある。
そして、相手の弱点は火属性だ。
それにより、火属性攻撃が可能な武器を装備するのがいいだろう。

「うーん、どれでいこうかなぁー。俺はこの大剣でいこうかな！」

そういいながらミロクが手にしたものは、真っ赤に染まった、あからさまにこれは火属性だとわかるような武器だった。
その大剣はとても大きく、更にとても重くと不便な点ばかりだが、攻撃力の高さではずば抜けて大きいものだった。
ミロクはその大剣を担いで集会所へと向かった。

その頃たかやんは――――――

「火属性だろー？多分ミロクはあの大剣で来ると思うんだよなぁー。だったら俺は二丁拳銃かな。なんてったって向こうは動きが遅いっていうデメリットがあるわけだから、こっちは早く動けたほうがいいに決まってるよな！よし！」

と、たかやんは独り言を呟きながら、あ、いや、叫びながら装備を着々と決めていた。
そして二丁拳銃を腰のポケットにしまい、集会所へと向かった。

そして二人は集会所で合流した。

「あぁー、やっぱりミロク大剣できやがったw」

「な、なんだよ。変えてくるか？」

「いや、俺はそう来るだろうなと思って相性考えて装備してきたんだ！」

「おま、すげえなwさすがたかやんだ！」

たかやんは自分の予想が当たったことに嬉しげな顔をしてアイテムの調達を終えた。

回復薬、爆弾、罠、食料、その他個人で必要なもの、を持ち、クエストへ出発した。

クエストの現場は「無人島」だ。

ここには至る所に雑魚モンスターがうようよしている為、大型モンスターだけに集中して攻撃することが若干困難な場所でもあるため、ここでのハンティングは上級として扱われている。

そして二人は無人島に到着した。

「ハァー、ここ来るの久々だなぁー！」

「おい、たかやん、あまり浮かれんなよ？ライムリア結構強いからな？」

「わぁってるよ、んな事！早速行こうぜ！」

二人は無人島の中を彷徨いながら、ライムリアを探していた。

すると、雑魚モンスターが急に攻撃してきた。

「痛っ」

傷は切り傷程度だったが、まぁまぁ深く刺さっていた。

「おい、お前、いきなり俺に噛み付くとはいい度胸じゃねえか…」

ミロクは噛まれたことに対して苛立ちを感じた。
そして斬りつけようと、大剣を下ろし、大きく構えた。
その時、たかやんが拳銃でバン！っと一発かました。
するとその銃弾はモンスターに直撃し、即死だった。

「ぅおい！俺が思っきりたたっ切るとこだっただろ！」
「ミロクの武器は隙が大きいからこっちで撃ったほうが早いと思ったんだ。しかも、今はソムイルを倒してる場合じゃないだろ？さっさとライムリア倒そうぜ！」

ミロクはそうだなと頷きそのまま探しに向かおうとした。
するとその時、後ろから大きな音が聞こえた。

「ん？なんだいまの音。」
「ライムリアさんのご登場だ！」

そう、ライムリアが空から舞い降りてきたのだ。
ライムリアは、ドラゴン。空を自由に飛ぶことができる。
※どんなモンスターかはご想像にお任せします☆

ライムリアは羽を使いゆっくりと着地した。
だがしかし、ライムリアはまだ、ミロクたちの存在に気づいていない。

「お、まだ気付いてないようだな。」
「ゆっくり近づいて、溜め切りしてこい！」

「任せな」

ゆっくりゆっくりとライムリアに近づいていき、真横にたった所で大剣を大きく構えた。
が、その時、気づかれた。

「グ…グオオォォォォォォ！！！！」

ライムリアは大きく咆哮した。
そしてミロクは剣を思いっきり振りかざした。

「うるせえぇぇぇ！！！！！」

その大剣はライムリアの胴体を斬りつけた。

「よっしゃ行くぞぉぉ！」

二人の死闘が始まった。
たかやんは、すごいスピードで、走りながら正確に顔面を撃ち抜いていた。
ミロクは大きな大剣をブンブン振り回し、ライムリアを斬りまくっていた。
するとライムリアはちょっとだけ飛び、口から雷球をこちらに吐きつけて来た。
その雷球はミロクに直撃した。

「ぐあぁっ！」

ミロクは感電してしまい少しの間体が言うことを効かなくなった。
その隙を逃さず、ライムリアはミロクを抑えつけ、大きな口でミロ

クを噛み付けた。

「うあああぁぁぁぁぁ！！！」

ミロクは叫ぶことしかできなかった。
するとたかやんは２つの拳銃をクロスさせて力を溜め込んだ。
そして両方の銃で一気に撃った。

「離れろォー！！」

その銃弾はライムリアの顔面に直撃した。

「グオォォォ！！」

ライムリアの大きな角が砕け散った。
それと同時にライムリアはよろけた、その隙を逃さずにミロクはすぐさまその場を離れた。

「助かったぜ……」
「あぁ、早く回復薬を飲め！すぐに来るぞ！」
「わかった。」

ミロクは回復薬を飲んだ。
すると傷がみるみる修復していく。

「元気百倍！ミロークマン！」
「おい、いいからさっさと攻撃に参加しろ！」

ミロクがつまらんボケを繰り出しているときに、たかやんはたくさんの攻撃を受け、からだがボロつてきていた。

「おお、ワリィ、よし、行くぜぇ！」

そして、ミロクが戦いに参戦し、攻撃を開始した。
ミロクの大剣はライムリアによく効いていたようだ。
だんだんライムリアも弱ってきている。

「よし、ミロク！こっちに落とし穴仕掛けとくぞ！」
「おっけ！」

そして落とし穴を仕掛け終わるのを見計らって、ミロクは落とし穴のある方へライムリアを誘導した。
ライムリアは見事に落とし穴にかかった。
その場で何もできず暴れているラムイリアの顔面の部分に二人は大きな爆弾を設置した。

「よぅし、たかやん！撃てぇぇ！！！」

たかやんは全力で溜めた銃を爆弾めがけて撃った。
すると爆弾は大きな音をたて爆発し、ライムリアの顔面はボロボロになった。
角が2本とも折れてしまったライムリアは、とてもかっこ悪かった。
するとライムリアが怒ってしまい、大きく咆哮をした。

「ぐあぁー！うるせぇーなぁー！」

するとライムリアは、空の方へ顔を向けて、また大きく咆哮した。
そうすると空はがだんだんと暗くなっていくのが分かった。
そして…

「グオォォォォォ！！！」

ズドン……バアァァーン！！！

空から雷が落ちてきた。
そしてその雷がたかやんとミロクに命中した。

『うあぁぁぁあ！！！！！』

二人は声を合わせ倒れてしまった。
いくら雷耐性の高い防具であろうと、雷をモロ受けてしまったら、大ダメージだ。

更に二人は感電してしまい全くからだが動かなくなってしまった。
果たして二人の運命は……？！

2話　ライムリアとの死闘　前編（後書き）

感想評価お願いします！
お気に入り登録（、・∀・/）ノヨロシク！

3話　ライムリアとの死闘　後編

「くっ…からだが…動かねぇ……！！」

雷をモロ食らってしまった二人は、からだが麻痺していて全く言うことを効かない状態に陥ってしまっていた。
ゆっくりとライムリアがこちらへと寄ってくる。そして、鋭利な爪でミロクのからだをおもいっきり引っ掻いた。

「ぐあああぁぁ！！」

体が動かないため抵抗できずやられるがままに攻撃されていた。
ミロクは、何度も何度も引っ掻かれていて、からだは傷だらけだった。

「ぐう…！うあぁぁぁぁ！！やめろぉぉぉ！！！！！」

それを横目で見つめるしかないたかやんはある意味ミロクより辛かったはずだ。
自分の仲間がズタズタにされてるのにそれを見守ることしかできない。

「ちくしょう…！動けよっ…！！！！！」

いくら頑張ってもやはりからだは動かなかった。
するとライムリアが今度はたかやんの方へよってきた。
そして今度はたかやんに攻撃を始めた。

「…！！ぐあああああぁぁ！！！！！死ぬっ！死ぬぅぅぅ！！！！」

「たかやぁぁぁぁん！！！ちくしょう…ちくしょぉぉ！！！！」

「光り射す閃光よ、今ここに新たな静寂を産み出せ。光の制裁」

「グオォォ？」

ライムリアの動きが止まった。
そのライムリアのからだには無数の光の矢が刺さっており、関節を止められていた。

「雷鳴に轟く稲妻よ、今ここに新たな激戦を打ち破れ。緑の宝札」

ミロクとたかやんのからだにあった無数の傷がみるみるうちに回復されていく。
そして、麻痺も溶けた。
体が自由に動く。

「大丈夫ですか？怪我の方は完璧には治りませんので、無理はしないで下さい。」
「あ、ありがとうございます！あのォ、どちらさまですか？」
「ほら、よそ見をしてはいけません。ライムリアが動き出しますよ？」

謎の男がそう言うと、ライムリアは大きく咆哮をした。
そして、ライムリアは口から雷球を飛ばした。
その雷球は謎の男の方へと飛んでいった。

「光り輝く天使よ、今ここに我の身を守りし一枚の壁を産み出せ。魔法の鏡」

謎の男がそう言うとその雷球は当たるギリギリにして消滅した。

「な、何だ、今の技…。すっげぇー！！」

「ミロク、さっさとこいつぶっ殺すぞ！」

ライムリアはもうすでに十分弱っていた。

ここからがラストスパートだ。

ライムリアは尻尾を武器に、振り回してきた。

ミロクは大剣でガードし、すぐに攻撃に繋げられるように準備をしていた。

たかやんはそもそも遠距離系なので尻尾なんて当たらないため、ずっと撃ち続けた。

「うおりゃ！！」

ミロクは大剣でライムリアの頭をたたっ切った。

するとライムリアは倒れた。

「今がチャンスだ！ミロク！思いっきり斬り付けろ！」

「あぁ！おーっりゃァ！！！とりゃあ！ふんならばぁっ！」

ライムリアはズタズタに斬られ、頭は銃弾でバシバシ撃たれた。

そしてライムリアはそのまま立ち上がることはなかった。

そう、ライムリアを倒したのだ。

「いよっしゃあー！」

「キタ━━━（ﾟ∀ﾟ）━（　ﾟ∀）━（　　ﾟ）━（　　）━（　）━（ﾟ　）━（∀ﾟ）━（ﾟ∀ﾟ）━━━！！」

「ようし！早速剥ぎ取りだ！」

二人は持参してる剥ぎ取りナイフでライムリアの素材を剥ぎ取った。
そして、そのまま集会所へと戻った。

「はい、こちら報酬金の￥5，４００です！」
「ありがとうございます。」

お金もいっぱいゲットしたし、今回は報酬が良かったのでミロクは満足そうな顔をしていた。

「あ、そういえば、さっきの人だれだったんだろう？」
「あぁー、後で見つけたら礼を言わなきゃね」

と、二人で話しているときに、その人はやってきた。

「やあ、二人とも。ライムリアの討伐お疲れ様。」
「あ、さっきの！」
「噂をすれば…だな」

その男はさっきまで防具のせいであまり良く顔は見えなかったが、今は顔がよく見える。
そして、ものすっごいイケメンだ。

「あ、先程はありがとうございました！」

二人は深々と頭を下げ礼を言った。

「いやいや、ただ通りすがっただけですから」

嘘へたくそっ！通りすがったって、無人島までなにしに来とんねん！

「あの、もし宜しければ、お名前を…」
「あ、私は　まいける　と申します。」
「まいけるさんですか、これからも色々お願いします♪」
「はい！あと、こちらから一つお願いがあるのですが…」
「なんでしょう？」
「あの、あなた達と共に行動させていただけませんか？いわゆるパーティーを一緒に組みたいのです。」

なんと、まいけるさんから、パーティーに入りたいという申請がきた。
こっちが頑張って誘おうと思っていたところだったのですごく嬉しかった。

「ほ、ほんとうですか？！」
「是非、よろしくお願いします！」
「いいんですか！？」
「えぇ、もちろん！」
「ありがとうございます！！」

こうして、一人仲間が増えた。

「ちなみに、もうお分かりでしょうが、私は”マジシャン”です。」
「やはりそうでしたか！すごく役に立ちました！ありがとうございました！」

コレで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンが出揃った。
これからもミロクたちのハンター生活は続く。

3話　ライムリアとの死闘　後編（後書き）

2話に渡るライムリアとの戦いが終わりました！

感想評価お願いします！

お気に入り登録（、・∀・,）ノヨロシク！

4話　ハンターさんの討伐クエスト

ライムリアの討伐を終えた二人は、途中死にかけていた所を救けてくれた謎の男「まいける」との再会を果たし、パーティーへ入れようという誘いをだそうと計画していた。だがしかし、なんとまいけるさんからパーティーへ入りたいという申請があった。もちろん迷うことなく二人はパーティーへと入れた。まいけるの職業はマジシャンだった。これで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンの全種類を使いこなせるパーティーとなった。

「あ、ちなみに、俺はソルジャーも行けるよ」

そう、たかやんはガンナー専門ではなく、ソルジャーも全然行けるのであった。
ミロクはソルジャー専門、まいけるはマジシャン専門、たかやんは、ソルジャーとガンナー。という職業になっている。

そして3人になったミロク達はアドバンス級をめざすために日々修行を続けていた。

「よーし、次は何狩りに行く？」

「うーん、そうだなぁ、なんか足りてない素材とか無いの？」

「あ、あの、私足りてない素材あるんです。」

「まいけるさん、何が足りてないんですか？」

「あ、えっと、メラレイト鉱石なんですけど…」

「鉱石ですか！しかも、メラレイト！？あんなの余裕で手に入るじゃないですか！」

「昨日使っちゃったんですよ、武器の強化にね。だから足りなくて…」

「あ、いいっすよ、行きましょうよ。フェイルの森行けば採掘できるっすよね」

「そうだね、でも、一応環境見とかないと。大型モンスターいるかも知れないからさ。」

「ですね！見てみましょうか！」

3人はクエスト一覧の横に書いてあるフェイルの森の環境状態をチェックした。
するとそこには

「狩猟環境：ややおだやか　天気：曇りっぽい晴れ　大型モンスター：サリアコイル 」

と書いてあった。

「天気：曇りっぽい晴れってなんやねん、っぽいってなんやねん、そして何故天気っていう項目を作ったのか、そんな事より小型モンスターのほうが重要だろうに。」

ミロクがクールにツッコミを入れた。
もう、ツッコミに慣れていて無駄なテンションの高いツッコミとは

違い、クールなツッコミだった。

「っつか、サリアコイルかよー！なかなか手強いじゃん！」

「そうですね、でも、サリアくらいなら余裕で行けますでしょ。ついでに討伐しちゃいましょうよ。」

「分かりました！じゃ、ミロク！装備変更し終えたらここで集合な！」

「あいよ」

たかやんが指揮をとってクエストに向かうことになった。
そして3人はそれぞれ装備を揃えたあと、集会所で集合した。

「ヨォし、みんな集まったな！しゅっぱーつするぞ？」

「いいよぉ」

「あ、待って下さい！」

「まいけるさん、どうしました？」

「ピッケル忘れましたw」

「なんでそんな重要なものをww」

「取りに行ってきます。」

「はぁーい」

まいけるさんが行きたいと言った採掘に欠かせないものを本人が忘れるのはどうかしてるだろうと、ミロクはムッすりしていた。

「おそいなぁ」

なんとそれから30分たってもまいけるは姿を表さなかった。
またそれから30分が経過。まだ、まいけるは来ない。

「おい、どういうことだよ、なにしてんだよあいつ。」

「さすがに遅すぎるな、なにやってんだろう。」

「さあな。」

「俺らで違うクエスト行こうぜ。」

「そうだな、そうするか。」

ということで二人は、違うクエストへ向かった。
そのクエストは「ギガアルデン」の討伐クエストだった。
ギガアルデンとはアルデンという雑魚モンの親みたいなやつだ。
正直強くはないが、ギガアルデンから取れる「騎楼獣の牙(きろうじゅうのきば)」が足りてなくて、討伐クエストに行くことになった。
ギガアルデンには1つだけとても強力な技があり、大きな牙で喉元を噛み砕くという技がある、その技を食らってしまうと死んでしまうと言われている。現に、死んでる人も少なくない。

「まぁ、ギガアルデンでも、油断すんなよ。死ぬ可能性だって低くないんだからな。」

「あぁ、わかってる。」

「じゃ行くぞ！」

二人はギガアルデンの討伐へと向かった。

このクエストの狩場はフェイルの森。
比較的狩猟がしやすい狩場だ。
そのおかげで、ギガアルデンをすぐ見つけることが出来た。

「おっと、見つけたぜ！」

今回の装備は、ミロクが短剣、たかやんが太刀を使っていた。
どちらもソルジャーのためすぐに終わりそうだ。

「とりゃァ！」

前回大剣だったミロクは短剣にしたためすごく軽く感じ動きが軽やかだった。
そしてすごくスピーディーできれいだった。

「ふっ！はっ！そりゃぁぁ！」

たかやんは、大きな鋭い太刀をギガアルデンに斬りつけていた。
ガンナーじゃなくても、ソルジャーでも、全然強さは変わらないようだ。
いや、むしろソルジャーのほうが得意そうに見える。

ギガアルデンも負けていない。

「グギャァァァ！！」

大きな声を出し、アルデンをたくさん呼び出してきた。

「ちくしょぅ、こいつらメッチャクチャ邪魔だ！」

「俺に任せろ！たかやんはギガアルデンだけに集中してろ！」

ミロクはそう言うと、短剣でスパスパとアルデンを倒していった。
アルデンはものすごいスピードで数が減っていく。
しかし、それに負けないスピードでアルデンがうようよ湧いてくる。

「コレじゃあいつまでたってもきりがない！ちくしょお！！」

「頑張ってくれ！こっちはもうソロ終わる！」

ギガアルデンも弱ってきていた。
ギガアルデンの目線の先にはミロクがいた。
ミロクはアルデンを倒していたため、ギガアルデンには気づいていなかった。
ギガアルデンはミロクの喉元に大きな牙を突き刺そうとしていた。

「ミロク！！あぶないっ！！！！！」

たかやんがそういったときには、もうすでに噛み付く寸前だった。
すると…

ひゅっ！！

ミロクが、急に姿を消した。

「ミ、ミロク…？」

たかやんは噛み付かれなくてよかったという気持ちと、何処へ言ったかという変な気持ちが入り混ざっていた。

「おい、ミロク！何処だ！　痛っ！ギガアルデン邪魔だぁあぁ！！」

大きく太刀を振り回す、すると。

「グギャアアア！！！！」

ギガアルデンは死んだ。

たかやんは一人でギガアルデンの討伐に成功した。

そのころミロクは———

「俺、なんでベッドの上に…？まあ、いいや。寝るか。」

時間を遡ること3分。

現実世界（リアルワールド）では…

「啓介ー！ご飯よー！」

「はぁーい　今ギガアルデンの途中なんだけどなぁ…。まぁ、あとでも来れるからいっか！ぶちっちゃえw」

「ほら啓介！ご飯冷めちゃうわよ！あ、ラーメンだった。麺のびる

わよ！」

「はいはーい！今行くからー！」

ということだ。

啓介が突然電源を消したため、ミロクが急に消えたのだ。

消えたと言うよりは、ログアウトしたという方が正しいのか。

どちらにせよ、ミロクの安全確保だ。

「今日はもう召し食ったら寝よっと。」

ミロクは、明日まで目をさますことはなかった。

ベッドの上でいびきをかき、疲れをとっているようだ。

「ミロク何処行きやがったんだ？ったく、あした聞いてみるか。今日はもう落ち」

———たかやンさんがログアウトしました。

4話　ハンターさんの討伐クエスト（後書き）

感想評価お願いします
お気に入り登録（、・∀・/）ノヨロシク

5話　ハンターさんの夢

「…はっ……はっ……はっ……ちくしょぉ……」

ミロクは全力ダッシュだった。
ミロクの後ろからは、大きなドラゴンが。
【神轟龍　アクティレス】
４大神の内の一体の龍。
神の放つ咆哮は、大地を轟かせ、天空龍の血を枯らす。

アクティレスの目線の先にはミロクしかいない。
ミロクはアクティレスにターゲットされている。

「……ハァ……ハァ…ハァ……クソ…！何処まで追いかけてきやがるんだ！」

ミロクは逃げる。
だがしかし

ズドン！

ミロクの目の前に、もう一匹の敵が。。。
【極星獣　ベルギウス】
鋭利な牙と鋭い爪で全てを薙ぎ払う。
その偉大なる魂が心を閉ざすとき、漆黒の闇へと葬り去る。

「おいおい、まじかよ…」

ミロクは足が竦んで動けなかった。
そして、超大型モンスターに挟まれたミロクは、そのまま2匹の餌食になるしかなかった。
2匹は同時にミロクに噛み付いた。

「う、うわあァァァァ！！！」

バサッ！！！

「うおぉ！……ハァ…ハァ…夢か……。」

まさかの夢オチだ。
ミロクはベッドから跳ねあがった。
だがしかし、ベッドからは出れないシステム。
すぐに動けなくなってしまった。

「ったく、また目覚めちまったよ。早く帰ってこないかなぁ。」

そう、ミロクは操作主である、啓介の帰りを待たねばならぬのだ。
この待っている時間がどれほど苦痛かみんなにはわかるだろうか。
なにも出来ずにベッドで横たわったまま啓介の帰りを待つ。
きつすぎるというしか無い。

「たぁだいまぁー」

今回は早く帰ってきてくれた。

「よっしゃ、早かったじゃねぇか啓介ー。」

ミロクのテンションゲージが上がった。

「そういえば今日は3人で狩猟かぁ。腕がなるぜ」

ミロクのテンションゲージがもっと上がった。

「しかも今日は、商売人さんの品物半額デーじゃん♪」

ミロクのテンションゲージがもっともっと上がった。

「啓介ー！勉強しなさーい！いつまでもゲームばっかりやっててもいい仕事に就けないわよー！」

「はーい。ったく、しょうがない。今日は我慢して勉強するか。」

ミロクのテンションゲージが0まで下がった。

「なんでだよぉぉぉ！！！なんでそうなるんだよぉぉぉ！！！おかしいやろぉぉぉ！！」

という訳で、今日はミロクはずっとベッドの上だ。
24時間後までまたなればならない。
24時間後には、狩猟に出れてるはずだ。

その頃、たかやんは――――

「ミロク、きょうこねぇのかなぁ。昨日急に消えてきょうこないって、まさか…。」

たかやんは変な妄想をしてしまっていた。

ミロクが誘拐されたんじゃないかと。

「そんなはずないか。」

たかやんは一人でクエストに向かった。

その頃、まいけるは――――

「いやぁー、昨日悪いことしたなぁー、テレビの前通過したら面白い番組やっててそのまま釘付けになっちまったんだよなぁー。やっちまっちなぁー。」

まいけるは、これっぽっちも詫びようとする姿を見せずんブツブツ言っていた。

そしてまいけるは「今日はもうやめるのか、早いなぁ」と言いながら消えた。

――――まいけるさんがログアウトしました。

「はあぁぁー、ジャンプ読み飽きたよぉー、暇ダァー。」

ミロクはこのまま1日を過ごさなければならなかった。

そして、２４時間後――――

5話　ハンターさんの夢（後書き）

感想評価お願いします
お気に入り登録（、・∀・/）ノヨロシク

短くてすいません
眠すぎますｗｗｗ

6話　ハンターさんの友情深まる

「よぉーし！昨日我慢したから、今日はたくさんやるぞぉー！」
啓介が気合を入れてそう言うと、ミロクの体が解放された。
「ん？お、おぉぉぉ！！動けるっ！動けるぜぇー！」
そう、ミロクは約３８時間ぶりの解放だ。
そのためミロクの体は大分鈍っていた。
「今日は何のクエストに行こうかなー、、、あ、そうだ！たかやんに謝らないと」
ミロクはクエスト一覧表のところに行った。
そこにはたくさんのクエスト情報と誰がどのクエストに行ってるかが記入されている。
「んーっと？たかやんはー……あ！あった！」
そこには確かにたかやんと記入されていた。
「ゲッ！あいつ…ベルギディウス行ってんのかよ…！」
【毒眼龍　ベルギディウス】
ドラゴンの中では小型タイプ。
小型が故に素早い動きで相手を翻弄してくる。
あいつと目が合うと超音波で猛毒を浴びてしまう。

「仕方ねぇ、俺も行くか…」

ミロクはたかやんに会いに渋々ベルギディウスの討伐クエストに行くことになった。

今回の戦場（バトルフィールド）は、「渓流」だ。

渓流は穏やかな場所でここでのハンティングはどちらかと言えば下級向けだ。

「さぁーって、たかやんは何処かしらー？」

ミロクが探していると、たかやんらしき人物が走ってくるのが見えた。

「ミ、ミロクゥゥゥゥーー！！！！た、た、助けてくれぇー！！！」

「え？」

たかやんの後ろにはベルギディウスがついてきていた。

「えええぇぇ？！」

ミロクはベルギディウス見つかってしまったようだ。

ベルギディウスはミロクに毒を吐いてきた。

「ぬおっ！あぶねぇ！」

ミロクは間一髪の所を躱した。

今回ミロクは、片手剣で来ていた。

そしてたかやんは大剣だった。
たかやんはその大剣で思いっきり下からベルギディウスを斬り上げた。
「うおぉぉりゃああ！！！」
その斬り上げた大剣はベルギディウスに、そしてミロクにも当たった。
ミロクは中に吹き飛ばされた。
「うそぉん…（泣）」
ミロクはそのまま地面に叩き付けられた。
「あ！悪い！見てなかった！」
「お、おぉ…気にするな…。」
ベルギディウスは咆哮した。
「ピギャアァァ！！！」
「よーし！行くぞミロク！ぶっ倒せぇー！」
「ごめん、俺、動けない…w」
「ちょ、えぇぇ！？」
ミロクは地面に叩き付けられと時の衝撃で、体が痺れていた。

「ちょっと休憩…」

「ったく！しゃあない！俺が相手だ！」

――――３０分後

集会所にミロクとたかやんの姿が。

「今回の報酬は￥８，３００です！」

「うほっ、大金！」

たかやんとミロクはなんとかベルギディウスを倒したようだ。

「いや、昨日は悪かったな、おとといも」

「あぁー、大丈夫！気にすんなって！」

「おぉ、まじか、ありがとう！」

「あぁ！早速クエスト行こうぜ！」

こうして二人に友情は更に深まったのであった。

6話　ハンターさんの友情深まる（後書き）

感想評価お願いします

7話　ハンターさんの世界へ（前書き）

新展開です。
こちらの話がメインとなります。
前置き長かったかな？w

7話　ハンターさんの世界へ

ジリリリリ！！ジリリリリ！！
目覚まし時計の音が部屋中に鳴り響く。
「う、うるしゃぁ……」
啓介は寝ぼけながらも目覚まし時計を止めた。
しかし啓介は起きる気配がなかった。
その間に時間が刻々と過ぎていった。
そして数分後――――
「…そろそろ起きるかぁ……。」
啓介がムクリと起き上がった。
そして、目覚ましを見ると同時に飛び跳ねた。
「うわあああああ！！もう8時２０分じゃ……7時だった…。」
時計を見間違えて叫んでしまった。
「啓介ー！朝からうるさいわよー！」
1階にいるお母さんに怒られてしまった。
「す、すんませーん！」

早く目がさめてしまった啓介は短い時間だけどゲームをやろうとした。
だがしかし、宿題を残していたことに気付き
啓介は勉強を始めた。

「ん、んん？３ｎ＋２＝５…？？なんじゃこりゃ、もう答え書いてるジャマイカ！超簡単♪」

啓介はものすごく頭が悪かった。
中２になっても方程式の一つも溶けないのだ。

「オォー、簡単簡単ー！らくしょー！」

そして、宿題が終わり登校まで時間があったため
パソコンの電源を入れ、ＰＣをいじり時間を潰していた。

啓介はそのまま登校時間になったのに気づかずＰＣで遊んでいた。
すると母親から言われた。

「啓介ー？時間大丈夫なのー？」

「んー？だいじょう……ぶじゃねぇぇぇ！！！ち、遅刻だぁー！」

啓介はカバンを持ってダッシュで１階に降りた。

「やべえぇ！！！い、いただきますっ！」

「あ、ご飯は食べるのね（笑）」

「ったりめぇだ!、飯食わねえと腹減って死んじまう!」

すごいスピードで食べていく。
全く噛んでいる様子が見られない。

「むぐっ、もう時間ない!もう行くわ!」

「はい、行ってらっしゃい、急いでるからって飛び出たらダメよー?」

「あぁ!行ってきまーす!」

啓介はそう言うと家から飛び出していった。
そしてちょっと走ると啓介の動きがピタっと止まった。

「え?どうしたのあの子(笑)」

その様子はまるで非常口のモデルみたいだった。
そしてそのまま180度回転し戻ってきた

「え?え?どうしたの啓介?!」

「しゅ、宿題が机の上だ!」

啓介は急いで2階へ駆け上がり宿題を取りに行った。
しかし、机の上にはなかった。

「あれ?!何処だ?!急いでるのにぃー!!」

啓介はあたふたしながら周りを探した。

けど宿題は見つからない。

「何処だよ！」

そう言いながらカバンの中のファイルを見てみた。
するとそのファイルの宿題は挟まっていた。

「ちくしょぉー！ここにあったのかよ！！」

啓介はまたダッシュで玄関に向かい、そのまま学校へと走っていった。

「気をつけてねー！　まったく、そそっかしいったらありゃしない！」

啓介はすごいスピードで走っていた。
足の速さは中の上。
特別速いわけでもないが遅くもない。
人並みに走れる程度だった。

「やばいっ！やばいっ！間に合わねぇ！」

啓介が走っていると前に風船を持った小さな少女がいた。
その子供は大事そうに風船に繋がったヒモを持っていた。
風船にはヘリウムガスが入っており、浮いていた。
すると大きな風が吹いた。
そのとき少女は誤って風船から手を離してしまった。

「あぁっ！待ってよぉー！」

その風船は道路の方へ行ってしまった。
普段は車の通りが少ない道路だったが、この時に限って車が来ていた。

「あ、危ないっ！！」

「…おい、坊や、大丈夫かの？」

目の前にはおっさんがいた。

「……え？」

そしてそこは、すごい格好をした人たちがたくさんいた。

「……ここ、何処？」

「はて？坊や、何処から来たんだい？」

急におっさんに問われた。

「待て待て待て…、え？まず、おっさん誰？」

「おやおや、威勢のいい坊やじゃの　わしはこの村の村長じゃよ」

「そ…村長？」

何がなんだかわからない。
啓介の記憶では、学校に遅刻しそうになり、走っている途中少女を見つけその少女が手放した風船を掴んだところまでは記憶がある。
現にいま啓介は手に風船を握っているのだから。
一応夢か確認するため啓介は風船を割ってみた。
すると大きな音を立て風船は割れた。
啓介もちょっとびっくりした。
この感覚は夢じゃなさそうだと判別した。

「坊や、大丈夫かね？そんなにボーッとしてぇ」

すると後ろからごつい体のお兄さんが近づいてきた。

「村長、何かあったんですか？」

そのごつい人はなんだか見覚えがあった。
あの服装といいあの髪型といい。何処かで見た気がしてしょうがない。
そしてごつい人はこっちを見て驚いた顔をしてきた。

「あ…あ…！！この人…！ぼ、僕知ってますよ！」

「へぇ？本当かいな？」

「あ、俺もなんか見たことあるんだけどなぁ…。」

そしてごつい人は言った。

「啓介だろ…？！」

そう、そのごつい人は啓介のことを知っていた。
その瞬間啓介も誰だか思い出した。

「……ミロク！！」

7話　ハンターさんの世界へ（後書き）

感想評価お願いします

8話　ハンターさんの仲間入り？！

「……ミロク…！！」

啓介はその男が誰だか分かったのだ。
そして、感付いた。
ここはあの『オンラインゲームの世界』じゃないかと…。

「やっぱり啓介だったのか！」
「ふぃ？お前さん達知り合いかね？」
村長がそう問うとミロクが威勢よく答えた。
「知り合いなんてもんじゃありませんよ！！」
「ふえぇ、それはびっくりだわい。それより、坊や。どうやってここへ来たのじゃ？」

村長にそう聞かれた。

「いや、それが俺にもわからないんだ」

不思議なことにその一部分の記憶がないのだ。
まるで、そこだけ切り取られたかのように。

「俺は…一体……。」

その後少しの沈黙があった。
そしてミロクが喋ろうとした瞬間に奥から誰かが呑気にスキップしながらやって来る。

「ミーロックちゃーん！どーおしーたのっ？」

すごく空気の読めない発言をしたため、場の空気はより一層気まずいものになってしまった。

そして、その男は見た目はチャラっぽくて顔はまぁまぁイケメン。
啓介はこの男が誰だかわかっていた。
間違いない。あいつは　たかやん　だ。

「おぉ、たかやんか、お前とことんＫＹだな。」

やはりたかやんだった。
たかやんとはいつもあっていたから、よく覚えている。

「んー？いいんだよ別に！ねぇねぇ、この人誰？」

「あぁ、啓介だよ」

「あ、よろしくどうぞ（笑）」

啓介は誰だかわかっていながら丁寧に挨拶した。

「啓介？なんか聞いたことあるような無いような、聞いたことあるって思ってもそれは気のせいかも知れないような、なんだっけ？えっと…んと、なんだっけ！？あ、もう喉のこの辺まで来てるよ！なんだっけ？！」

「俺の操作主だよ。」

ミロクがそう言うとたかやんは思い出したかのように口を大きく、目をぱっちりと開け叫んだ。

「あぁー！そうだった！操作主か！そっかそっかー！納得納得。」

みんなはたかやんをガン見した。

たかやんは自分が何故ガン見されているか気づいていない。

「ひょ？みんな、どうしたの？なんで見てくるの？」

「なんでお前気づかねぇんだよ」

ミロクがそう突っ込むと、たかやんは少し考えた

そして、やっと気付いたようだ。

「あぁー！！！ここここの人！現実世界（リアルワールド）の人じゃ？！なんでここにいるの？！」

今度はみんながため息をついた。
「だから今それを探ってんだよ…！」
「あ、そういうことか！」
たかやんやっと理解したようだ。
すると村長が口を開いた。
「とにかく、ここへ来てしまった以上一緒にクエストをこなしていくしか無いのじゃ、ミロクたちと一緒にクエストに行ってこれるかの？」
「え？お、俺が…ハンター？！」
「そうじゃ」
啓介は驚いた、急にハンターをやれなんて言われると思っていなかったのだ。
「よぉーし、啓介！今日からよろしくな！」

8話　ハンターさんの仲間入り?!（後書き）

感想評価お願いします
眠いので短くなってしまいましたｗｗ

9話　啓介の初クエスト

村長にクエストに行ってくれと言われた啓介は若干パニック状態だった。

「ちょ、ちょっと待って下さい！僕帰りますよ？！」

啓介がそう言うとみんな「は？」という表情を浮かべた。

「お、おい、啓介。今なんて言った？？」

「い、いや、帰るって…。」

「はぁ…。そんな事できると思ってるの？」

「逆にできないの？！」

「できるわけ無いじゃんか！誰かが向こうの世界とこっちを結ぶ何かを作ってくれれば話は別だけど…。」

「えええええ！！！！」

啓介はがっくりと肩を落とした。

「じゃ、じゃぁ俺、ずっとここでハンター生活しなきゃいけないの？？」

「そうじゃ、お前さんにはこの村を守ってもらうぞい！」

「よぉーし！啓介！早速俺がハンターについて色々と説明してやる！」

「えええぇぇ？！そんな、いきなり？！」

「お、俺もぉー！」

「たかやぁぁァぁーん！！」

「あ、啓介殿！コレ防具じゃ、貸してやるわい。」

そう言うと村長は初級ハンター用の防具を貸してくれた。
初級用だが性能はバッチリだ。
フェイルの森に適した防具になっている。

「それじゃあ、早速行きますか！」

そう言ってミロクとたかやんが啓介が一流ハンターになるための第一歩目を踏み出させるため、フェイルの森へ行った。
そしてフェイルの森で早速教えることになった。

「よし！多分細かいことは俺を動かしてたんだからわかるだろう！」

「まぁ、大抵のことはわかるぜ」

「じゃぁ、とりあえず！自分にあった職業を探すんだ！」

「あぁー、そうだなぁー。何が合うんだろうか？」

そんな話をしていると、村の方から誰かが歩いてきた。

「あ！まいけるさん！」

そう、それは以前助けてもらったまいけるさんだった。
その時の装備より格段に強そうになっていた。

「あ、こんにちは！お久し振りですね！」

「お久し振りですね！じゃないっすよｗｗ　この前はどうしたんですか？」

「あ、すいません、ついついテレビに気を取られてしまって…ｗｗ」

「操作主がですか？」

「そうですｗ」

「そうだったんですか、心配したんですよ！とりあえずよかったです」

「ご迷惑おかけしましてすいませんでした」

ミロクとまいけるが話している間、たかやんはちょっと遠くにいるアルデンを狩っていた。
アルデンの数は意外と多くて何気に大変そうだった。

「ミロク、俺の職業どうすんの？」

「あぁ、悪い。なんか得意そうなの無い？」

「うーん、詠唱とか覚えらん無さそうだからマジシャンは無理かなぁ」

「そっか、難しいもんねぇー」

「俺ずっとソルジャーでやってたから、俺もソルジャーにしようかな！！」

「おっ！イイね！じゃあ、まずコレであそこのアルデン狩ってこいよ！」

そう言うとミロクは啓介に短剣を渡した。

「短剣か！使いやすそうだ！」

そう言うと啓介は走ってアルデンの方へ向かった。
近づいていくと分かるのだが、アルデンは思ってたより大きかった。
普通の競馬の馬くらいの大きさだった。

「うわ！意外とデケェ！」

今まで画面からしか見てなかったものが目の前にあって、更に迫力がすごいと感じた啓介には
自然と笑みがこぼれていた。更に小刻みに震えていた。

「んん？どうしたの啓介？おしっこ漏れる？」

「ちげぇよ！武者震いだよ！」

たかやんに対しての初ツッコミであった。

「なんか、今までは雑魚モンスターだったけどこうやって近くで見ると、すげぇ迫力あるし、すげぇ怖い。それがなんか、楽しいんだ…！」

「それはそれは！やっぱ啓介にはハンターの才能あったのかもな！」

「じゃ、とりあえずあのアルデン倒してみな！」

たかやんにそう言われ、アルデンに近づき、短剣で斬りつけた。

「うおおりゃァ！！！」

スカッ！

「え…。」

『ブフッ……』

短剣のリーチの長さを理解していなかったためか、アルデンには当たらず空振りしてしまった。

3人は笑いをこらえるのに必死だった。

全力で制御していた。

そしてアルデンに気付かれてしまった。

「ウギャァァァ！！」

アルデンが吠えた。

すると啓介が耳を抑えだした。

「うわあああああああああ！！！！」
3人はきょとんとしていた。
「啓介、なんであんなに痛がってんだ？」
するとたかやんがひらめいた。
「あ、あいつ、耳栓してないんじゃね？」
「あ」
「…。」
すっかり忘れていた。
そしてたかやんが啓介のところへ行き、耳栓を渡した。
「耳栓はハンターの必需品だよ。付けないと簡単に鼓膜破れちゃうからね」
「もっと早く言えぇぇ！ボケェ！！」
そう言って啓介は涙目を見せながらも耳栓をつけた。
「コレで、少しは楽になるのかな…」
すると、向こうから大きなモンスターが走ってくるのが見えた。
「あ、あれは…！！」

「ギガアルデンですね」

「え？！ギガアルデン？！嘘ぉ！」

「啓介！頑張っ！」

「えぇぇぇぇぇ！！！！」

9話　啓介の初クエスト（後書き）

感想評価お願いします！
ランキング投票も是非お願いします♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5883z/

これこそリアルなハンター生活。

2012年1月8日23時56分発行